

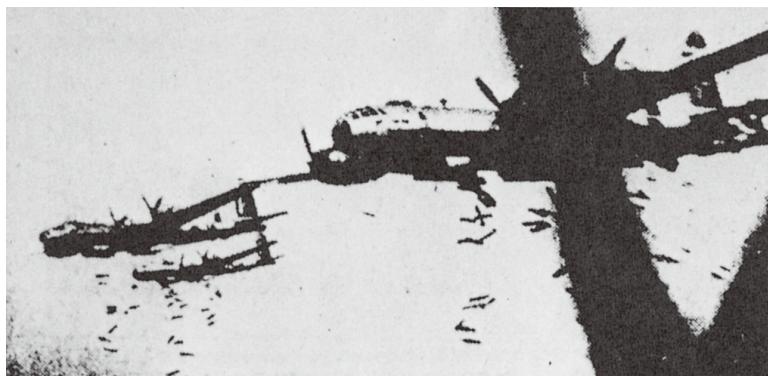
敵機來襲

本多義光

一九四四年（昭和十九年）十二月十八日、国民学校六年生だった私たちは、学校から少しはなれた天白川の農場へ行っていた。堤防の下に私たちの農場があり、今日も食りよう増産のための畑仕事だった。

十時ごろ、サイレンが警戒警報を知らせた。担任の伊藤先生が「すぐ帰るように。」と言われた。私の家は東海道本線の笠寺駅の近くにあった。かなりの道のりだが走つて帰ると、家では母が防空壕へ退ひできるようにすでに準備を終わっていた。しかし、しばらくすると警報解除のサイレンと同時に半鐘の鐘があちこちで鳴った。ほつとした気持ちになつた。午前中に解除になれば登校することになつてるので、さっそく学校へ行つた。

教室に入つて担任の先生を待つていると、少し青い顔をした伊藤先生が鉄かぶとを持つて走るようにして来られ、「敵機の大編隊がこちらへ来るようだからすぐ家へ帰りなさい！」となるよう言われた。とにかく早く帰らなくてはと思い、急いでくつ箱の所まで来た。その時再び警戒



B 29 の 猛爆

警報のサイレンが鳴った。今日は二度目である。飛行機の大編隊とはどんなものだろうか、内心そんなにたいした事はないだろうと思っていた。そして、すぐ解除になる事を期待していた。

しかし、期待はみごとにはずれ、やがて空襲警報のあのぶきみなサイレンが鳴りひびき、あちらこちらで一・四の半鐘（カーン、カソカソカソカソ）が鳴りだした。走つて家に帰った。

私の家は西に東海道本線と岡本工業（当時の軍需工場）がある。東には十間道路（現在の国道一号線）がある。父も母も国道や軍需工場側は危険だからと言うので同じ社宅の水野さん宅の壕へ入れていただくことにした。防空壕の中は畳一枚ぐらいの広さで、そこにはすでに奥村さん一家も心細いからといって入っている。「死ぬ時はいっしょだね。」といつて七人が重なるようにして入つていった。

道路の通行も禁止されている。静かな静かな時間である。どのくらいたつただろうか、やがてB29のあの重苦しい爆音が聞こえてきた。何といやなひびきだろう。「敵機来襲……敵機来

襲……」の声と同時に一・七の鐘がけたたましくなった。その時かすかにゴーゴーと道路に何かが通るような音がした。そして、その音は大きくザアーという音にかわり、地面を何かでたたくよう。ポコポコというひびきとなり、ゆらゆら、ドドンバリバリとび上るように身体がゆれる。

これが爆弾だ。必死である。先生から教えられたように、目と鼻と耳をしつかりおさえ口で息をする。しばらくそれが続き、一息したと思うとまた敵機来襲の鐘が鳴る。と同時にゴーゴーザードドンバリバリである。今日は死ぬのだと覺悟を決めた。

しかし、やつと空襲警報解除のサイレンが鳴った。身も心もくたくたになってしまった。防空壕から外へ出た。ものすごい砂ぼこりか、それとも煙だろうか何だかぼつとして薄暗くなっている。時刻は三時少しすぎている。よく見ると約百メートルほどはなれた所に爆弾が落ちているではないか。びっくりすると同時に「よかつた、よかつた」と水野さん、奥村さんたちと喜びあつた。

この時期まだ爆弾の跡は珍しく、さつそく見に行く。見舞いの人たち、跡かたづけの人たちでごつた返している。たんす、長もち、着物類、屋根がわらなどがむちやくちゃになっていた。ひとつずつ爆弾でこんなに被害が出る。直撃を受けた家は何も残っていない。全く大損害である。今日の敵機は何機来たか当ててみようと話していたが、百機ぐらいだろうというのがみんなの話だった。しかし、翌日の新聞には七十機と記されていた。

家へ帰った。かべは落ち、畳の上は土でいっぱいである。その中で母がごそごそ何かやつている。どうしたのかと聞くと、今すぐ岡崎のおばあさんの所へ行くという。時はすでに四時半である。父のすすめもあり私も行くことにした。明日、学校があるがそんなことは考えてもいない。名鉄電車の笠寺駅（現在の本笠寺）へ行くが、不通である。阿野駅（現在の豊明）より開通しているという。しかたがないので歩くことにした。

東海道を阿野に向かつて、てくてく歩く。馬車、リヤカー、うば車などを引く人波でいっぱいである。不安と恐怖<sup>さようふ</sup>で鬼<sup>おに</sup>のような顔をしている人たち、何と恐ろしいことだろう。私たちから笑顔をうばつてしまつたあのB29がにくい。

鳴海<sup>なるみ</sup>まで来た時、爆弾が田んぼに落ち、すずみのわらが（田んぼにつんであるわらのこと）高压電線に引っかかり、ちょうど人間が首をつっているようで無気味な感じがした。

阿野からうす暗い電車に乗つた。うす暗い電車の中は疲労しきつた人々で満員である。荷物にもたれて眠つている人、袋から米のいつたものを出して食べている人など、どこかへ避難するのだろう、ほとんどの人が大きな荷物を持っている。

やつとの思いでおばあさんの家に着く。しかし、おじいさんもおばあさんもきょうの名古屋の空襲に驚いて、さらに山の家へ行つたことである。母と二人、全くどうしようもなく困つてしまつた。どなりの人と話しているうち「一晩とまつて行きなさい。」と言われ、ほつとする。夕食をすませた頃、また警戒警報、続いて空襲警報のサイレンが冷たい夜空に鳴りひびく。父のこ

とを心配しながら防空壕に避難する。さいわい敵機は一機で、昼に空襲した所をてい察にきたらしい。まもなく解除になつた。

翌朝ねむい目をこすり、お礼をいつて山の家へ向かつた。

(名古屋市緑区在住)

## 豊橋の街まちが焼失したとき

朝 倉 治 子

一九四五年（昭和二十年）六月二十日未明、みめい 豊橋市とよはしはアメリカの航空機B29の襲撃しゆうげきを受けた。今から三十数年前のことである。

「人の記憶きおくには限りがある。」

「今、記録しておかねば。」

というあせりにも似た気持ちでペンをとつた。

その夜、私たち兄弟はまくら元に防空ずきんと衛生箱（救急箱）を置き、服を着たままでどこについていた。いつ起こされてもそのまま玄関前の防空壕に飛びこめる準備である。あの頃は毎夜のように空襲警報が出されて、服のままでねむる日が続いていた。